

てらお くらしの のーと

「おだやか・やわらか」

寺尾での暮らしは

まさにそんな言葉が似合う。

広がる緑、温かな人々、四季のにおい。

おだやかでやわらかな時間をつくりだす要素。

Terao Life Magazine「てらおくらしののーと」では

そんな暮らしや日常の要素をきりとり

ストーリーとしてお届け。

What's "Terao"?

栃木県の南部に位置する栃木市。

その栃木市の北西部に位置するのが寺尾地区です。

尻内町、梅沢町、大久保町、鍋山町、
星野町、出流町の6つから成る寺尾地区。

人口2300人ほど(2025年現在)のちいさな地域。



CONTENTS

広がるのは目一杯の緑	04
春夏秋冬	06
「寺尾で『暮らす』はちょうどいい」	08
ここは「まちの談話室」	10
お祭りや行事はまるで大きな同窓会？	12
感じた、都会にはない地域のつながり	14
より良いものづくりを地道に続ける。この地で	16
おだやかでやわらかな、日常snap	18





広がるのは 目一杯の緑、
そして 田園風景。

静寂の中に、
カサカサと木々が揺れる音。
川のせせらぎ、鳥のさえずり。

「はぁ、ふー」
思わず深呼吸をしたくなる
そんな気持ちになる景色。

ここにはどこか
心地いい時間が流れる。





三峰山

ぞうが寝そべったような形からぞう山、
鍋を伏せたような形から鍋山、
とも呼ばれる山、三峰山。

Our symbol

やつたねさん

長く私たちの暮らしを見守ってきた山は
どこか愛らしく私たちのシンボルのような山だ。

—
Spring
—



—
Summer
—



—
Autumn
—



—
Winter
—



「春夏秋冬」

四季を感じられるって
なんだろう。
自然との距離感なのかもしれない。

ふとそんなことを思った。
ここにいと、
温度や景色はもちろん。
食べるもの、
お裾分けのラインナップもかわる。
そして、
四季ごとのにおいがある。

四季を
直に感じる。

同時に
豊かさを感じるのだ。



寺尾で『暮らす』は ちょうどいい

～移住者夫婦が語る寺尾の暮らし～

「寺尾はちょうどいい田舎」と話すのは、ぬい農園の縫村啓子さん。夫の啓美さんとともに寺尾でぬい農園を営んでいる。啓子さんと啓美さんは地区外から移り住み、化学肥料や農薬を使わない有機栽培で農作物を育てている。寺尾の出身でない縫村さんご夫婦が寺尾で農業を行う理由、寺尾暮らしの魅力を伺った。

おじいちゃんの家へ孫ターン。
それが寺尾暮らしのスタート



啓子さんが寺尾に移住したのは、2014年のこと。大学卒業後、民間の会社に就職をしたが農業の道に進みたいと、入社3年で退職。

「農業をするなら幼少期を過ごした長野かおじいちゃんのいる栃木」と考えた啓子さん。最終的には栃木への移住を決意する。「決め手は家や農地があったこととおじいちゃんが1人で住んでいることも気になっていたこと」と啓子さんが話すように寺尾への移住のきっかけは祖父である重義さんの存在が大きかったようだ。その後、2年間の農業研修を経て、2016年に独立。2017年に啓美さんと結婚し、啓美さんも農業経験があったことから、同年に合流し現在の2人体制に。



距離感も不便さも
“ちょうどいい”

啓子さんは寺尾で暮らし10年、啓美さんは7年が経つ。寺尾の暮らしの魅力について何うと「ちょうどいい田舎感」と話す。「近所の人に野菜をお裾分けしたら、数日後に玄関の前に魚が入ったビニール袋が吊り下がっていました。こういう食べ物のやりとりみたいなものは多いですね。かといって、お互い干渉しすぎずいい距離感だと思います」と啓子さん。「『寺尾は不便だ』と良く言われます。確かに車がないと不便ですが、手の届くところになんでもあるという暮らしよりもちょっと不便さを感じた方がおだやかで過ごしやすいのかなと思います」と啓美さん。人と人の距離感も不便さもちょうどいい、そんな暮らしが寺尾にはあるのかもしれない。

ぬい農園

栃木市大久保町にて夫婦で農園を経営。
化学肥料や農薬を使わず作物を有機栽培している。

Instagram: @nuinouen

ここは「まちの談話室」

（人口70人ほどの集落の憩いの場【橋本誠商店・のんのん茶屋】）



出流町にある橋本誠商店は、日用雑貨や加工品を中心とした食品も販売している長年地域の方に愛される商店だ。

商店の一角は、のんのん茶屋と名付けられた喫茶スペースになっている。「みんながのんびりできる場所になりたい」という店主の思いからその名になったそう。

「しょっちゅうここに来てはおしゃべりをして、買い物をして帰るのよ。それが毎日の楽しみなの」と近所のお客さんは話す。

商店・喫茶でありながら、そう、ここは「まちの談話室」。



暮らしやすさとは？

橋本誠商店がある出流町は寺尾の中でもより山間部の集落にあたる。

『出流そば』というそばが名産で、多くの観光客が訪れる町だ。

人口は70人ほどでほかの集落までは距離が離れており、市街地までは車で40分ほど。しかし、地域の方に話を聞くと「暮らしやすい」と話す。



「そんなに不便さは感じないね。
ちよつとした買い物はここでできるし、
みんなが助けてくれるからね。
それから、みんな昔から知っている。だから気を使わないのよね。
それが一番」

便利⇨暮らしやすい、ではない。
暮らしの中の優しさとおだやかさ。
それが心地いい。
それがここでの暮らしやすさ。

橋本誠商店・のんのん茶屋
日用品や食品などが並ぶ酒屋。
コーヒーや甘酒などの喫茶も楽しめる。
住所：栃木県栃木市出流町160



お祭りや行事はまるで大きな同窓会？

夏祭りや体育祭、どんど焼きなど、
お祭りや行事が今でも残る寺尾。

普段は静かなこの地域も
にぎやかな声であふれる。

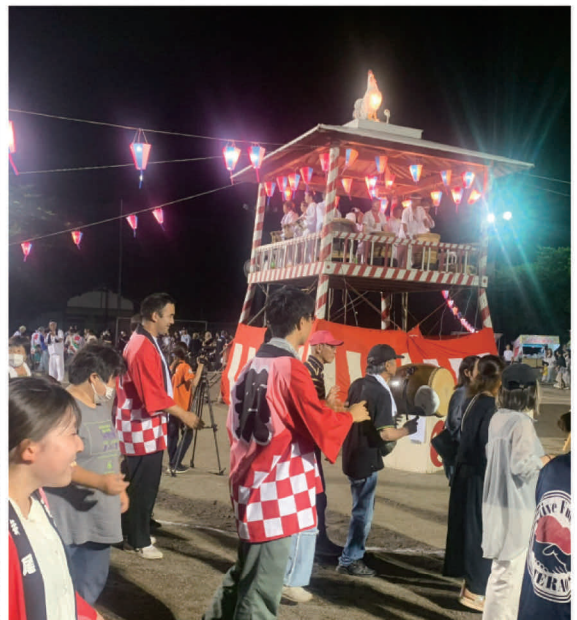
「久しぶりー」、「やっぱり来てたかー」

そんな声があちこちで。

もはや大きな同窓会だ。

そんな光景をみると「ほかほか」と
温かな気持ちになるのだ。





感じた、 都会にはない 地域のつながり

よそのものから見た、
つながりの中で生きる
寺尾の暮らし

寺尾では2022年より地域づくりインターンの会という学生団体から毎年大学生が派遣され、寺尾で夏休みの間過ごし、地域の方々と接点を持ち一緒に地域づくりの活動を行うプログラムを実施している。学生たちは派遣期間が終わった後も自主的に寺尾を訪れ、地域の行事やお祭りに参加をしている。なぜ、学生たちは寺尾を訪れ、その後も寺尾に関わり続けているのだろう。2022年の派遣生の一杉大智さんと2024年の派遣生の小野心巳さんに外からの目線で寺尾の魅力を伺った。



Q2

寺尾で過ごしてみた印象は？

(一杉)

びっくりしたことは人の優しさと温かさです。都会と違って近所づきあいがあり、お裾分けの文化や行事がたくさん残っていました。滞在をしたのは、2週間ほどでしたがその間地域の一員になれたような感覚でとてもうれしかったです。

(小野)

最初は、2週間知らない土地で暮らすことにとても不安を感じていました。けれど、「ごはん何食べた?」「夜寒くなかった?」と毎日のように私たちを地域の方々が気にかけてくれて、自分たちを受け入れてくれている温かさを感じました。



一杉大智さん

法政大学 現代福祉学部 4年 (2025年3月 現在)

小野心巳さん

法政大学 現代福祉学部 1年 (2025年3月 現在)

Q1

なぜ、寺尾を訪れようと思ったのですか？

(一杉)

私は大学の授業で地域づくりインターンのプログラムを知りました。元々政治や社会に興味があり、それを学ぶために地域に出る機会を探していました。ちょうどコロナ禍で私が1年生の時には派遣がなかったのですが、2年生になった時に再開することになり、参加をしました。地域づくりインターンの会では、複数の派遣地域がありその中で派遣先を選ぶのですが、地域コミュニティーに興味があったので地域のつながりが強そうな寺尾を選びました。

(小野)

私も大学の授業で地域づくりインターンのことを知り、特に地域について学びたいとか興味があるというわけではなかったのですが単純に「楽しそう!」と思い参加をしました。私が派遣生の時は6つの地域があり、どの地域も良かったのですがイベントや行事が多く、楽しそうだった寺尾に行くことにしました。

びっくりしたのは
人の優しさと温かさ





Q3

「暮らす」はうらやましい顔の見える関係性で

寺尾の魅力はどんなところだと感じていますか？

(一杉)

団結感がすごいと思っています。なにかやるときに地域の人が協力をして行っているところがなかなか他の地域ではできないことだなと思います。ただそれが頑張り過ぎている感じもなく自然とつながっている感じがするんですよね。

(小野)

私は派遣後に4、5回ほど寺尾を再訪しているのですが、寺尾の人たちと話すことが楽しみで何回も訪れています。優しくておだやかな寺尾の人たちが大好きです。なので、人が魅力ですね。

Q4

印象的だったエピソードは？

(一杉)

派遣期間中、メンバーの1人が一足先に派遣を終えて帰るタイミングがあったんですが、その時に「みんなで食べて」と地域の方に手作りのアイスをもらったのを覚えています。そのメンバーが最終日ということに気を配っていただき、その心遣いがすごうれしかったです。

(小野)

夏祭りの時に地域の人たち同士がみんな知り合いのように集まって話をしていたり、あいさつをしていたのが印象的でした。自分の住んでいる地域は行事や近所づきあいがまったくないので顔が見える関係性が暮らす上で安心ですし、うらやましいなと思いました。

Q5

今後も寺尾のために…

今後の関わりは？

(一杉)

私はもうすぐ社会人なので、寺尾に行ける頻度は少なくなってしまうと思います。ただ、これまで寺尾と関わってきたことで寺尾のことが自分事として捉えられるようになってきました。だからこそ、お祭りや行事にも積極的に関わって寺尾のために何か手助けになるようなことをしていきたいと思っています。

(小野)

私は寺尾の人たちに恩返しをしたい気持ちでいっぱいです。これまでたくさんお世話になったので、寺尾のためにできることを探していきたいです。先日、マルシェの時には自分たちで作った寺尾のキーホルダーをカプセルトイで販売しました。これからも自分の好きなことや得意を生かして寺尾のためになることをやっていきたいです。





この地で

地道に続ける。

より良いものづくりを



いちひこ帆布は寺尾で帆布を使ったバッグや小物類の製造・販売を行っている。

オシャレでかわいいデザインのバッグや小物は遠方にもファンがいるほど、人気の商品だ。

いちひこ帆布の代表・小曾戸聡さんにいちひこ帆布立ち上げの背景やものづくりへのこだわりを伺った。



Uターンをきっかけに家業の道に

聡さんは寺尾で生まれ育ち、就職を機に寺尾を出たものの当時働いていた会社の退職をきっかけに寺尾へ戻ってきた。寺尾に戻ってからは聡さんの父・一彦さんが縫製業を営む、小曾戸製作所の手伝いを始める。

手伝っていくうちに「縫製業っていろいろできるじゃん」と感じ始めたと言う聡さん。

そして、帆布製品を作り始めたのもたまたまだったそう。

「いここから帆布でイスを作ってほしい」と要望があり帆布を使ったイスを作ったと言う。そこで帆布の可能性に気づき、帆布バッグが誕生した。

誰も気付かないような細部まで気を配る、ものづくりへのこだわり

製品づくりで大切にしていることは、「もっと良いものをつくりたい、という気持ち」と聡さんは話す。

これまで作ってきたバッグや小物はどれも改良に改良を重ねた製品。誰も気が付かないような違いまで気を配る。

「より良いものを地道につくり続け、それが自然と広がっていったら」と聡さん。

これからもより良いものを目指したもののづくりがこの寺尾で続いていく。



いちひこ帆布

帆布を使ったスタイリッシュなデザインと耐久性のあるバッグや小物を製造・販売している。

住所：栃木県栃木市梅沢町839-1

Instagram: ichihiko_hanpu

おだやかで
やわらかな、
日常snap



「気持ちよさそうだし
とりあえず、寝よう」



手書きがかわいい。
のんのん茶屋のメニュー



農作業中に突然始まる畑端会議



「ちょっとお茶をしていけば？」
気づけば2時間経っていた



全身で感じる自然のパワー！



暑すぎる夏のお仕事は
「川で」



台風一過の夕暮れは
オレンジと青のグラデーション



「カンッ」と聞こえる
ボールを叩く音



「やっといたから」
いつの間にか終わっている
耕起作業



これが一人分ですか？
お裾分けのショウガ

編集後記

2021年に着任した地域おこし協力隊の活動が終了を迎えようとしている。思い返すといろいろな思い出が蘇ってくる。最初は何をしていいかわからず、手探りで活動を行ってきた。とりあえず自分の好きなことをやってみようと、そばを育ててみたり、マルシェを開催してみたりした。すると、その活動が地域の人たちと自分をつなげてくれた。徐々に地域と自分の距離が縮まってきていることを感じていた。その活動も、早4年。いつの間にか寺尾に住居も構えていた。それだけ、寺尾に魅了されたのだろう。私が魅了されたこの寺尾を何かで伝えられたらと今回の「てらおくらしののーと」の制作に至った。おだやかでやわらかな、寺尾の暮らしと日常の魅力が少しでも多くの方に伝わりますようにと願いを込めて。



國府谷 純輝

栃木県茂木町出身。大学進学を機に上京。大学卒業後は民間企業を経て、2021年6月に栃木市地域おこし協力隊に着任。寺尾をフィールドにイベントの開催や情報発信、関係人口創出の活動を行う。



発行：栃木市地域振興部 地域政策課

2025年3月 発行

文・写真・構成：國府谷 純輝

デザイン：中尾 菜穂